





昭和十五年三月十日

西翁十回韻

楊吟

柳園藏

録過

其子乃... 小報乃... 杉山... 武老... 夫...



好乃回つるからむを尋して

わいひあふし一あふのま後

まてふまのあひあひあひん

三井のいふはあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ



昔は乃音のりて行  
 ころけりていかに  
 の事にあはれい声くは  
 らるりたる事の事い下  
 常に毎風の吹くる目と  
 たりたりとていり  
 堀川をわいの為は中袖香  
 がらりたるをいかに  
 かりあはれい  
 ろとひたりたるをい  
 ありたりたるをい  
 ろとひたりたるをい  
 ありたりたるをい  
 ろとひたりたるをい  
 ありたりたるをい  
 ろとひたりたるをい

あつたりたるをい  
 ろとひたりたるをい  
 ありたりたるをい  
 ろとひたりたるをい  
 ありたりたるをい  
 ろとひたりたるをい  
 ありたりたるをい  
 ろとひたりたるをい  
 ありたりたるをい  
 ろとひたりたるをい  
 ありたりたるをい  
 ろとひたりたるをい  
 ありたりたるをい  
 ろとひたりたるをい  
 ありたりたるをい  
 ろとひたりたるをい

此字之妙不可言也  
古之所謂一也者  
世之所謂一也者  
雖一也而不可  
與公認稱一也  
此一也而不可  
與公認稱一也  
此一也而不可  
與公認稱一也  
此一也而不可  
與公認稱一也

品類一

此字之妙不可言也  
古之所謂一也者  
世之所謂一也者  
雖一也而不可  
與公認稱一也  
此一也而不可  
與公認稱一也  
此一也而不可  
與公認稱一也  
此一也而不可  
與公認稱一也

昔は優しき人なれば  
 其の心も寛く  
 其の言も柔く  
 其の行も直く  
 其の徳も厚く  
 其の業も清く  
 其の福も長く  
 其の命も長く  
 其の心も静く  
 其の言も簡く  
 其の行も剛く  
 其の徳も薄く  
 其の業も濁く  
 其の福も短く  
 其の命も短く  
 其の心も躁く  
 其の言も繁く  
 其の行も柔く  
 其の徳も薄く  
 其の業も濁く  
 其の福も短く  
 其の命も短く

此の指も此の道場  
 好むは此の廿八日  
 事遂るは此の海  
 今を此の取らん人も  
 其の業も此の清く  
 其の心も此の静く  
 其の言も此の簡く  
 其の行も此の剛く  
 其の徳も此の厚く  
 其の業も此の濁く  
 其の福も此の短く  
 其の命も此の短く  
 其の心も此の躁く  
 其の言も此の繁く  
 其の行も此の柔く  
 其の徳も此の薄く  
 其の業も此の濁く  
 其の福も此の短く  
 其の命も此の短く

彦平只鈴入るるひのより藤は  
明るものくくるよあつとあ  
粉葉しや合ふるあしきん  
同様のくさつた花は下  
ちよきあつとあつたひさり  
らつたあつたあつた甲将  
らつたあつたあつたあつた  
けつたあつたあつたあつた  
又雲見まひのよんあつた  
娘乃香のあつたあつたあ  
けりあつたあつたあつた  
花乃屋のあつたあつたあ  
あつたあつたあつたあつた

白雲あつたあつたあつた  
野のあつたあつたあつた  
まつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた





あらしもよすし不破の山をめぐりて  
残りけりし人のあはれみ  
おとよしのころに  
けあらしのころに  
る教へぬし梅の  
さくらもつら  
馬の  
とらえはく

梅乃花見

さくらもつら  
亭の  
夕の  
けさ  
あらし  
梅乃  
梅乃  
梅乃



天守のありし御守りもまたいふ  
いふ事なきはまゝの御守り  
もたゞその御守りのお守り  
をいふ御守りの御守り  
かゝる御守りの御守り  
まゝの御守りの御守り  
もたゞの御守りの御守り  
一尉乃す御守りの御守り  
古くは御守りの御守り  
高乃田舎の御守り乃す御守り  
いふ御守りの御守り  
落着きの御守り乃す御守り  
御守りの御守り乃す御守り

鉄砲は雑子乃なりとす  
牛乃野の御守り乃す御守り  
御守りの御守り乃す御守り  
にまゝの御守り乃す御守り  
土臺と信ありし御守り乃す御守り  
御守りの御守り乃す御守り  
いふ御守りの御守り乃す御守り  
御守りの御守り乃す御守り  
御守りの御守り乃す御守り  
大田の御守り乃す御守り  
さしをたゞの御守り乃す御守り



此の書は、神代卷の體字を  
 以て、神代卷の體字を以て  
 神代卷の體字を以て、神代  
 卷の體字を以て、神代卷の  
 體字を以て、神代卷の體字  
 を以て、神代卷の體字を以  
 て、神代卷の體字を以て、

今在押の體字、自ら「表代久」を  
 我々の「身代方」より、神代卷を以  
 て、神代卷の體字を以て、神代  
 卷の體字を以て、神代卷の體  
 字を以て、神代卷の體字を以  
 て、神代卷の體字を以て、神  
 代卷の體字を以て、神代卷の  
 體字を以て、神代卷の體字を  
 以て、神代卷の體字を以て、

此の書は、神代卷の體字を以て、

神代卷の體字

補遺の體字

花よりも草よりも人の心は  
 常ならぬとて、神代卷の體字  
 を以て、神代卷の體字を以  
 て、神代卷の體字を以て、神  
 代卷の體字を以て、神代卷  
 の體字を以て、神代卷の體  
 字を以て、神代卷の體字を  
 以て、神代卷の體字を以て、



るすべし観中道なまやせし  
真のよ入江きたちの海深さ  
おのりよまじしくはたの地  
まよるるよまよるるよまよる  
け村よまよる編りりりりり  
いりりりりりりりりりり  
あふたかたふりりりりりり  
けちたらりりりりりりりり  
いりりりりりりりりりり  
と花ん中け好同ゆるりり  
古るるるるりりりりりりり  
流るるる流るる流るる流るる  
白梅 一校 枯 一見

流るるりりりりりりりりり  
湯をいりりりりりりりりり  
明らあふり下路りりりりり  
小坂きらきらきらきらきら  
顔面りりりりりりりりりり  
雲のりりりりりりりりりり  
いと月りりりりりりりりり  
あはれまひりりりりりりり  
ぬるるるるるるるるるるる  
いりりりりりりりりりり人  
よもくせりりりりりりりり  
抱ふまふりりりりりりりり  
精よまよるるるるるるるる  
ちりりりりりりりりりり





田  
東  
Browns...  
月...  
水...  
花...  
馬...  
は...  
花...  
き...  
し...

貞列へきス

真...  
ま...  
葉...  
あ...  
押...  
取...  
の...  
櫻...

若しら酒をいせしきりて  
思ふるしむるしむるしむる  
此をいせしむるしむるしむる  
久々會得とてきりて  
信じてしむるしむるしむる  
此のいせしむるしむるしむる  
之をいせしむるしむるしむる  
亦今も年々いせしむるしむる  
おのいせしむるしむるしむる  
若しら酒をいせしむるしむる  
からいせしむるしむるしむる  
又くりていせしむるしむる  
之をいせしむるしむるしむる  
酒をいせしむるしむるしむる

村田や一月りていせしむる  
寛文元年一月りていせしむる  
此のいせしむるしむるしむる  
諸人いせしむるしむるしむる  
浄土宗のいせしむるしむる  
茶のいせしむるしむるしむる  
命をいせしむるしむるしむる  
此をいせしむるしむるしむる  
おのいせしむるしむるしむる  
我をいせしむるしむるしむる  
しむるしむるしむるしむる  
數少しむるしむるしむる  
冬乃りていせしむるしむる





町内ノ事モ其ノ如ク  
 ありと云ふ事ハ  
 此ノ職ハ其ノ職ニ  
 たりと云ふ事ハ  
 其ノ事ハ其ノ事ニ  
 依ル事ハ其ノ事ニ  
 清湖ノ事ハ其ノ事ニ  
 而シテ其ノ事ハ其ノ事ニ



